

今日は一人で 中出し当番

官能小説集 2

今日は一人で中出し当番

アダルトグッズ開発の舌調ベ

スクール水着の先輩に抱かれる

レズ姉妹にパイプ扱いされる

フェラを見ながら手コキ

水泳部の子に集団ぶっかけ

兄の婚約者に脅されて

後背位で連続中出し

後輩の上手さに翻弄されて

男の子を囲う女の子たち

パニーさんと飲みながら

お嬢さんは年下で十八歳

パンツ見られてオナニーされる

男の子をナンパに成功した

会社で女上司に犯される

混浴で女の子二人に左右から

顔射ルーレット

姉に狙われる弟

姉が妹に手を出すとき

女の子をペットにする時代

わたし
ひとりで
するん
ですか
?

体験版

二角レンチ

R - 1 8

目次

今日は一人で中出し当番	3
バニーさんと飲みながら	9
原作利用権について	17
プリンタでの印刷方法	19
奥付	20

今日は一人で中出し当番

クラスの中出し当番は毎日二人。でも今日は、一人が早退してしまった。私は一人だけでクラスの男子たちに囲まれていた。

他の女子もみんな忙しくて、代わりがいなかった。今日は私一人で中出し当番を務めないといけない。

男子はみんなセックスが好きだ。女子にセックスさせろとしつこく迫ってくるのでみんな困っていた。

だから女子みんなで決めて、放課後にセックスさせてあげることにした。そのかわり、それ以外で女子にセックスをねだらないことを約束させた。男子がそれを守らないならしてあげない。だから男子はみんなそれを受け入れた。

人数が多いので、早く終わらせるために生で中出しさせてあげることになっていた。安全日を調べて当番を決めていた。

私ともう一人が当番だったのに、その子は熱を出して早退してしまった。今日は他に大丈夫な子がいなかった。だから私は一人でクラスの男子全員の相手をしないといけなくなった。

男子はみんなすごく早かった。セックスといっても入れたあと少し腰を振るだけで出てしまう。こっちはじっとしてるだけ。

それでも二人でしてもしんどい。それが今日は一人だけ。大丈夫かな。不安でドキドキする。

男子はいつも、二人の女子に交互にセックスしていた。毎日二回射精していた。

「今日は私一人だけだから、一回だけね。本当にきついから。それ以上無理だから」

私は男子たちに念を押した。男子たちはニヤニヤしながらうなずいてくれた。

男子って何でこうスケベなんだろう。毎日クラスの女子二人とセックスする。どんな女の子でもかまわずセックスする。私はまだセックスでいったことがないから男子がそんなにしたがる気持ちがわからなかった。

私は裸になる。みんなもう脱いで勃起していた。

私は男子たちの勃起ペニスを見ながらオナニーした。みんな上を向いている。すごいやらしい。なんで男子のあれってあんなにいやらしい形をしてるのだろう。エッチすぎてたまらない。

自分の手でいじっていると気持ちよくなってきた。じゅぶじゅぶと濡れた音がする。男子がそれを聞いて近づいてきた。

「もう、準備できただろ。ほら。机にのって」

私は二つ並べた机の上にお尻をのせてあがる。ねそべって、足を曲げて開く。

自分で濡れた割れ目を指で広げる。ねっちょりと音がしてぱっくり開く。

「ん。いいよ。乱暴にしないでね」

男子が私を取り囲む。一人が前に出る。あらかじめアミダで順番を決めてあった。

男子のペニス。上を向いてお腹にくつつきそう。みんなオナニーせずにセックスばかりしているせいか、大きくて立派だ。剥けてるし、亀頭がすごく大きい。先細りの子はいなかった。

まだセックスでイったことはないけれど、亀頭が大きくカリが張り出したペニスで中をこすられるのは気持ちよくて好きだった。

男の子がペニスを入れてきた。ああん。大きい。ん。気持ちいい。

ぬぷぬぷと数回腰を振ると、男子が腰を止めた。びゅるびゅると、中にたくさんそそぎ込まれる。

ああ。もう終わっちゃった。みんなすごく早い。気持ちいいのにすぐ終わってしまう。ビデオみたいに、長い時間セックスするのってどんなだろう。きっとイケるんだろうなあ。長いセックスしたいなあ。

男の子が顔を寄せてくる。キスしようとしてくる。

「駄目。キスは駄目ってみんなで決めたでしょ」

「で、でも俺、キスしたことない」

生中出しセックスをさせるだけ。それが中出し当番。キスやフェラはしないとみんなで決めていた。

「したいんだ。駄目？ 絶対他の女子にはばらさないから。なあ」

他の男子もうなずく。たいていの男子はキスをしたことがないらしい。みんなすごくしたがっていた。

「んー。本当にみんな、誰にも言わない？ 私だけキスさせたってばれたら私すごく困るんだから」

みんな本当に秘密にすると豪語していた。すごく熱心に約束してくる。そんなにキスしたいんだ。セックスはしてるのに変なの。

「ん、じゃあ。今日だけの秘密ね」

男子がすごい喜びながらキスしてきた。舌が入ってくる。ん。キス気持ちいい。

「お、おい、早く代われよ」

別の男子が催促する。私の中から硬いままのペニスが引き抜かれる。あん。なんだかすごく惜しい気がした。

次の男子が入れてきた。根本まで一気に入れたあと、私にキスしてきた。

にゆるにゆると舌が入ってくる。んん。気持ちいい。キスってどうしてこんなに気持ちいいのかな。

キスしたまま腰を振る。私は男子の首に手を回して舌を激しくからませあう。

「お、おい。なんだか、なあ」

「すげえいやらしくない？」

「いやらしい」

「すげえ」

周りの男子たちがどよめく。

そんなにいやらしくみえるんだ。そうかも。いつもはただ入れて腰振るだけ。キスもしないし抱きあわない。

なんだか愛しあっているみたい。頭がぼーっとする。キスしてるから口もあそこもとろけるみたいに気持ちいい。いつものセックスと違う。なんだかすごく気持ちいい。

男の子が射精する。中に注がれる。あん。もう終わり？

口を離す。口から涎が糸を引く。男の子がすごく切なそうな目で私を見る。胸が熱くなる。なんだかすごく愛おしい。

私は男の子の顔に手を添えキスをした。男の子が私にのしかかり、再び腰を振る。

「あ、おい、何してるんだ」

「ずるいぞ。代われよ。代われったら」

男の子は大きく腰を振る。さっき射精したのに硬いままだ。それどころかさっきより大きい。興奮してるからだろうか。

大きいペニスでごりごりこすられる。抜かないから快感の波が引いていない。どんどん高まる。今までにないほど気持ちよさが強くなる。

「ん、ん、んんん」

キスされたままだから声が出せない。でもすごく声を出したい。あえぎたい。たまらない。我慢できない。

男子の顔を手で押し退ける。自由になった口からとんでもなく大きな声が出る。

「ああああん。あん。んああ。はああ」

男子たちが驚く。自分でも驚く。すごく甘ったるい潤ったあえぎ声。

「な、なんだ」

「こんな声、はじめて聞くぞ」

「感じてるんじゃないか」

「セックスで、気持ちよくなってるの？」

「女の子も気持ちよくなるんだ」

男子たちはいつも入れてすぐ射精する。セックスで女の子を気持ちよくしたことがない。だから女の子が本気で感じている声を聞いたことがなかった。

「うん。あ。気持ちいいの。セックスすごい気持ちいい。こんなの初めて。あ。ああ」

私はあえぎながらくがくふるえる。全身にすごい快感の波が押し寄せる。その波に押され汗が吹き出る。口を開けて涎が垂れる。

「なんだ。これ。やばいんじゃないか」

「違う。イってるんだ」

「え？ 本当にイってるのか」

「すげえ。女の子ってセックスでイクんだ」

男子たちは女の子がイクのを知識でしか知らない。はじめて目の当たりにしてものすごく興奮している。

私もセックスでイクのははじめてだ。これがイクってことなんだ。すごく気持ちいい。

今までのセックスやオナニーの気持ちよさとはまるで違う。こんな全身に広がる強い快感があるなんて知らなかった。

「え。うわ。締まる」

私に入れている男の子がうめく。どびゅっと射精した。

気持ちよくて身体が言うことをきかない。びくびくと膣に力が入ってしまう。締め付けられたペニスはひとたまりもなく射精してしまう。

「どけ。次俺だぞ」

別の男子がすごく興奮しながら入れてきた。入れたとたん射精する。

「こうするとイクんだよな」

男子が多いかぶさりキスをしてきた。どうやらキスしながらセックスするとイクんだと思っているらしい。

たぶん違う。キスは気持ちいいけれどそれだけじゃない。

いつもは射精すると抜いていた。ペニスを抜くと膣から快感が引いていく。だから何人してもイケなかった。

さっきの子は違う。射精しても止めなかった。膣からペニスを抜かずにセックスを続けた。だから快感がイクところまで高まっていった。

男子がふるえる。二回目の射精をした。

今度はイケなかった。物足りなかった。もう少しなのに。またイきたい。さっきのすごいのもう一度欲しい。

「んんん。ねえ。みんな。休みなく入れて。連続してズボズボするとイケると思うの。どんどんして。早くして。お願い」

男子たちがざわめく。そして次々入れていった。

みんなキスしたがった。キスしながらするセックスが気持ちいいと経験した男子が言うのでみんなした。みんな入れてから二回ずつ射精した。

何度もイった。すごく疲れた。ふらふらで、でももっともっとして欲しかった。

一周したあとまた入れてきた。すごい。最初の子以外みんな二回射精しているのに。萎えている子はいなかった。みんなギンギンに勃起させて順番を待っていた。

二回射精したせいか、みんな長持ちした。おかげで私は何度もイ
くことができた。

ああ。すごい。セックスってこんなに気持ちよかったんだ。今ま
で中出し当番嫌だったけど、今はすごく好きになっていた。

たくさんキスをした。順番を待っている子が左右からキスをして
きた。

三周目。ああん。みんなすごい。なんで萎えないの。

もう私のあそこはどろどろだった。精液が絶え間無く流れだし、
そこへ突っ込まれてまた精液を追加された。

私はイきすぎて敏感になっていた。しかもみんな長持ちした。私
はもう、一人の男子に二回も三回もイカされるようになった。

全部終わってみんな我にかえった。外は暗くなってきた。

みんなやばいといいながら急いで後始末した。疲れきった私の中
を指でかき出し拭いてくれた。

みんな私に気持ちよかったとかありがとうとか言いながらばたば
たと帰った。男子が二人残ってくれて、私を家まで送ってくれた。

その後、中出し当番のとき男子は女子にキスをねだった。秘密っ
て言ったのに。でもキスしながら抱き合ってセックスするとすごく
気持ちよくて、女子たちもはまっていった。

今では中出し当番は一日四人に増えていた。前はみんな嫌がって
いたのに、今では早く順番が来るように人数を増やしたのだ。

みんな気持ちいいセックスを楽しんだ。ただ一つ問題があった。
私たちは誰も、恋愛を経験したいと思わなくなっていた。

(完)

バニーさんと飲みながら

レオタードからこぼれそうなほど大きな胸。バニーさんはそれを押しつけながら俺の唇へグラスを傾けた。

ここはバニーさんの格好をした店員がお酒を飲ませてくれるお店だ。バニー嬢というのだがみんな愛情をこめてバニーさんと呼ぶ。

バニーさんは黒のレオタードと網タイツというオーソドックスなスタイルだ。

うさ耳としっぽだけが白いのはなぜだろう。たぶんウサギの色というだけではなく黒を際立たせるためだろう。

ゆったりふかふかのソファにバニーさんと二人で座る。小さなテーブルには酒とつまみが置いてある。バニーさんが酒をついで吞ませてくれる。

でもそれだけではない。この店では、そのバニーさんといろいろ気持ちいいことができる。それがメインの風俗だった。

この時代では法は大幅に改正され、売春は合法になっている。

売春を隠れて行い犯罪の温床になるより、合法的にやらせてかわりにきっちり監視し取り締まる。それにより犯罪数も被害者も激減した。

もちろんこれは目的の一部にすぎない。一番の目的は、財政赤字に困った国が合法的に多額の税金を搾り取ることだった。

そのおかげでこうしていろいろな店でいろいろなセックスを楽しむようになった。とてもいいことだ。

どこでも刺激的で楽しいサービスを行っていた。俺はこの店ははじめてだ。美人のバニーさんと酒を飲みながらのんびりセックスまでできる。とても楽しみだ。

この時代は時間も発射回数も無制限が多い。客が満足するまでいくらでもする。

かわりに客も満足したらだらだら残らずに店を出る。

たいていの客は一回か二回の射精で限界だし、時間もそうかからない。回転率は上々だった。

昔みたいに息苦しく時間制限があると楽しめるわけがない。今の自由気ままな風俗は客も店もとても満足のいくものだった。

俺はバニーさんがグラスを持って吞ませてくれる酒を少しずつ呑む。うまい。身体が火照ってくる。

「こちらもそろそろいかがですか」

バニーさんがほほえみながら俺の股間をなでてくる。

バニーさんの顔を見る。店は暗くて近くでないと顔がよく見えない。だからキスできそうなくらい近くで顔を見る。

すごい美人だ。きれいな顔。落ち着いた眼差し。ひかえめなほほえみ。長く美しい黒髪。すべてが落ち着く。ずっと一緒にいたくなるタイプだ。

今、売春は誰に恥じることもない立派な仕事だ。

たいていの若い女は風俗を副業として働く。おかげで客は金さえあれば美人を選び放題だった。

美人のお酌でちょっと一杯。いい気分になったあとはそのままセックス。こういう風俗が俺はお気に入りだった。

バニーさんの胸をもむ。彼女はあっと甘い吐息を漏らす。

やわらかい。バニー用のレオタードってなんでこんなに胸が露出してるんだろうな。うれしくてたまらない。服と胸の間に手を潜り込ませる。

服の下で直接やわらかい胸をもむ。彼女の顔が少しずつ紅色に染まっていく。しっとり落ち着いた美人だけにすごく色っぽい。

艶がある。とても上質な女だ。この店は結構かかるのだが、こんないい女と満足するまでセックスできるなら安いものだ。

彼女は二十台後半。人妻だ。三十路手前の女は熟女の色気と若い女の弾力ある肌の両方を兼ね備えている。一番おいしい身体だった。

この時代は恋愛や結婚とセックスは別物になっている。彼女の夫は彼女が風俗で働いていることを知っているし咎めない。

もちろん俺の妻も子供も俺が風俗へ行くことを咎めない。昔は後ろめたい行為だったらしいが引け目を感じることなく楽しめるというのは重要だろう。

「うん、ん、ふううん」

彼女は胸をもまれながら甘い鼻息を鳴らす。目を細めキスをおねだりしている。

俺はわざとじらしていたがそろそろたまらない。その赤く厚ぼったいふっくらした唇に吸いつく。

やわらかいのには弾力がある。キスしごたえのある唇だ。唇を押しつけながらその感触をたっぷり楽しむ。

「はあ」

唇を離すと彼女が湿ったため息をつく。その目はとろんと垂れてもっと欲しがっている。なんて色気だ。こんなの我慢できるか。

俺は唇を割って舌をねじ込む。ずるずぼと大きな音をたてて吸いつきながら口の中を犯す。

彼女の舌は巧みにやりかえしてくる。キスには自信があったがさすがに多くの客の相手をしているだけある。舌使いが巧みだ。蕩ろかすつもりが逆にこっちが蕩ろかされてしまう。

俺は夢中になって胸をもみしだきながらキスをする。

俺の歳では風俗を含め、抱いた女の数が百人を超えるのが普通だった。

俺も例外ではない。なのにこんなに、キスだけで我を忘れるほど夢中にされるなんて。

彼女が俺のペニスを直に握る。

驚いた。いつの間にかズボンからペニスを取り出されていた

キスに夢中で気づかなかった。いや、気づかせないようにして取り出した彼女が巧いのか。

ぎゅっぎゅっと根本に押し込むように上から下へしごく。くう。硬いペニスにあわせた強さでしごかれる。ちょっと強めでちょうどよい。ううう。たまらない。

こっちも負けじと彼女の股間へ手をのぼす。レオタードの肌触りはとてもなめらかで指がよく滑る。するすると股間を強めになであげる。

「ふあ。あああん」

彼女がとたんに高い姦声を上げる。演技ではなく本気で感じている。俺だって指技には自信がある。さわさわと指を素早く細やかに動かす。

「ん、あ。はあ。いけない人」

彼女がせっぱ詰まった声でつぶやく。そのセリフの焦り具合が本気で感じていることを如実に表している。否が応にも漲ってくる。

彼女も指でやり返してくる。俺よりも複雑で繊細、でもすごい勢いで責め立ててくる。

おぐ。やばい。なんて上手さだ。くう。さすがに責め方ではまるでかなわない。

ペニスが完全に勃起させられる。この歳でここまで硬くされるなんて。相当上手くないと無理だ。彼女の指は本当にすごい。

お互い息を切らせ汗を垂らしながら互いの急所を責め立てる。先走りをしみ出させたペニスをしごく音がぐちゅぐちゅと鳴り響く。

たしかに指のテクは彼女のほうがはるかに上手い。しかし先に音を上げたのは彼女のほうだ。

「ん。はあ。あん。駄目」

彼女がびくびくふるえている。もうイクようだ。多くの客を相手にしてきて敏感にさせられた身体はイキやすくなっているようだった。

このまま彼女の絶頂あえぎを聞いてもいいが、俺の好みはこれだ。

俺は彼女にキスをする。唇をからめ舌を突っ込み声を出せなくさせる。

「ん。ふんん、んん、んあ」

彼女は声をだせず苦しいまま達する。びくびくびくびく激しく身体をふるわせる。

絶頂に達するときに出る絶叫にも似たあえぎ声は、強すぎる快感を発散させるためのものだ。口を塞いで出せなくすると、逃げ場のない快感が身体の中にとどまり、通常の何倍もの快感を感じることになる。

彼女は長いことびくびくふるえていた。手足が電気を受けたみたいにびくんとびたりはねたりした。

それが終わり、彼女はぐったりとソファに寝ころぶ。

俺はテーブルの上のグラスをあおり、中の酒を一気に飲み干した。ボトルからもう一杯注ぎ、それも一気にあおる。

身体の奥からかっとなる。ペニスもう限界だ。辛抱できない。

ソファに寝ころぶ彼女を見下ろす。よほど気持ちよかったのか、息も絶え絶えにぐったりしている。この調子では回復までまだ時間がかかりそうだ。

俺はズボンとパンツを脱ぎ取り横のソファに投げ出す。

テーブルからコンドームを取り装着する。

彼女の股間あたりの網タイツに指をかける。力をこめて左右に引っ張る。

破れない。もう一度、汗が出るほどぐぐっと力をかける。

ビビッ。プチプチ。網タイツが音を立てて裂けていく。

「はあ。あ。待って。まだ」

彼女がうっすらと目を開けてこちらを見ている。嫌がっているそぶりか本当なのか。どちらにしてもそそる表情だ。

もちろん彼女が落ち着くまで待つつもりはない。レオタードの股間を横にずらす。網タイツが破れたそこにはぬらぬら光る濃い色のあわびがうごめいていた。

亀頭を当てがいずぶりと押し込む。貪欲な淫獣がぬぐぬぐとおいしそうに飲み込んでいく。

「はああ。あ。そんな。あ」

彼女がぐったりしながらも弱々しくあえぎはじめる。思い切り絶頂させて弱った女を一方的に犯すのはいつもたまらない。

「もう根本まで入ったぞ。ん。どうなんだ」

彼女にのしかかり耳に口を押し当てささやく。アルコールの酔った吐気を辱めと共に耳に吹きこむ。

「ああ。やあ」

彼女は快楽に溺れる。首を弱々しくふりながら身をよじる。

俺は腰をゆすりながら意地悪くささやく。

「どうなんだと聞いたんだ。いやなのか。止めて欲しいのか」

いやと言いながら悦ぶ女に赤裸々なおねだりを言わせる。これが実に楽しい。

「あ。あ。いいです。すごく気持ちいいです。中で、大きくて、こすられて、たまりません」

俺は女がしゃべる間突いてしゃべれなくし、しゃべらないと腰を止めてしゃべるまで待った。その繰り返しで女はどんどんいやらしいおねだりを口にする。

「あああ。はあ。お願い。じらさないで。思い切り。思い切り突いてください」

「優しく抱いてやっているんだ。不満なのか。激しく犯してほしいのか」

「そんな。ああ。意地悪しないでください」

「意地悪なんてしていない。優しく抱いているじゃないか。それとも激しく犯されたい雌豚なのかお前は」

「そんな。私、そんなんじゃ」

「どうなんだ。雌豚なのか。いや格好からして雌兎か。貞淑な女か淫乱な雌兎か、どっちなんだ。はっきりしろ」

「はあ。ああ。やあ。わた、私、雌兎です。犯してほしいくて飛び跳ねる淫乱色狂い雌兎ですううう」

「よく言ったな。ならお望みどおり、人参を食わせてやる」

俺は身体を起こすとさっきまでとはうってかわって激しく腰を動かす。この歳でも若い者には負けないぐらいの勢いで、激しくばんばん突きまくる。

「うああ。すごい。ああ。おいしいです」

雌兎は俺の硬人参をおいしそうに食べる。奥まで飲み込みそれでもあきたらずに締め付け食ってくる。

足を開いてひざを曲げ、兎のような格好のバニーさんがソファの上でぎしぎしびくびく跳ね回る。

胸をはだけさせやわらかい乳肉をもみしだく。ぎゅうぎゅうしぼりながら怒濤の勢いで腰を振る。

くそ。暑い。汗が出てくる。上も服を脱いでおくべきだったか。

年甲斐もなくこんなに興奮してしまうとは。なんてそそる女だ。犯さずにはいられないほど妖艶な女だ。

かろうじて二十台。この若さでどんな熟女よりも女としての色気が成熟しているなんて。いったいどれだけの男をくわえこんだらここまでの色気を持てるんだ。

女がのけぞる。身体がはねる。背をそらせ、ソファの上でエビが跳ねるように跳ね上がる。

いったか。俺はペニスを引き抜き立ち上がる。

暑い。背広を脱ぎネクタイをゆるめる。シャツも脱いで全部横のソファに投げかける。

またグラスに酒を注いで一気にあおる。興奮しすぎて吞まずにはいられない。

酒のせいで射精しないのか。それにしても、萎えるどころかありえないほど硬くなっている。

この女。いやらしすぎる。中の具合といい身体つきや視線、言葉にしぐさ、どれをとっても今までの女で最高だ。

くそ。生でできないのだけが残念だ。風俗で生は厳禁だ。畜生。生で犯して孕ませたい。

激しく息をつく女をソファの上でひっくり返す。四つん這いになる力もないようだ。顔は突っ伏したまま腰をあげ膝を立てる。

でかい尻だ。しかも張りがある。女房みたいにたるんでいない。いい尻だ。

レオタードと破れた網タイツがそれを強調する。いやらしくてたまらない尻だ。その尻を愛おしくなで回ったあとでペニスを割れ目に突き刺す。

レオタードのすそから挿入する。さっきより格段にきつい。

大きな尻を手でたぐりよせながらゆっくり大きく出入りを繰り返す。

締め付けがさっきよりもきつい。体位のせいか。それとも俺をイかせようとしているのか。

突き責める速度を上げる。腰についた兎のしっぽがふりふり揺れる様がかわいい。

「はあ。あ。んあ。ああ」

女は腰を突くたび小さくあえぐ。

「犯してほしいんだったな。そら。これでどうだ」

女の尻をわしづかみ、激しく男根を突き入れる。とたんに女の声が大きくなる。

いつもならとっくに射精しているのにまだイかない。おかげで射精するほどの快感をえんえん味わうはめになる。

ここで止められるか。強すぎる快感に歯を食いしばりながら腰を振り続ける。

女がまた達する。それでももうお構いなしに突き続ける。

はあ。はあ。もうすぐ出る。より強くなる快感にもう腰を止めてしまいそうだ。射精を絞り出すのがこんなにつらいとは思ひもしなかった。

魔性の女とはこういうことか。酒をあおらずにはいられないほど興奮する。そのせいでこんな苦しい快感に悶えさせられる。

たまらない。こんなに気持ちいいのははじめてだ。

「ぐうう。うお。出る。出るぞ」

ようやく上り詰めた射精感。欲棒を思い切り突き入れ解き放つ。

びゅぐぐ。びゅるうるる。

これでもかというくらい大量に絞り出される。腰が抜ける。ここまで根こそぎもっていかれる射精ははじめてだ。こんな快感があったとは。この歳になってはじめて知った。

「おう。ふ。ぐうう」

女の尻を握りしめる。張りのある尻が押しつぶれる様はあまりにも淫猥だ。

腰をびくびくふるわせて最後の一滴まで絞り出す。コンドームをつけていてよかった。もし生だったら、耐えきれなかったかもしれない。

力つき、女の背にもたれかかる。俺の耳元で女がささやく。

「はあ。ん。どうしますか。もう一回、しますか」

もう勘弁だ。俺はそのまま快感の余韻を味わった。

(完)

原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。

原作を使用する人は、すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、同時に二角レンチのブログ「ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版」内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版

<http://stockstackstory.seesaa.net/>

プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

1. A 4 コピー用紙を用います。
2. 印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
3. 「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
4. 両面印刷で一枚につき 4 ページが印刷されます。
5. 中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
6. 二つ折りにすると完成です。

A 5 サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

(注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限りです)

奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

今日は一人で中出し当番 官能小説集 2 体験版

発行日

2011 年 10 月 10 日

著者

二角レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>